

ガイドの豆知識 | 南宗寺の建物の二重構造について

【山田 武彦】

「南宗寺本坊は大坂夏の陣(慶長20年・1615年)で焼失し、早速復興に着手し元和2年(1616年)に現在地に仮堂を建てたと言われています。(堺市博物館資料)この大坂の陣の前から焼失時、そして復興の時代に南宗寺の住職を務めていたのは、かの有名な沢庵和尚です。(慶長12年・1607年から住職、前掲資料による)ところが、この焼失後、南宗寺に未曾有の大問題が起こります。すなわち寺地の移転です。宿院町東から現在の南旅籠町に移転を余儀なくされました。しかも新しく計画された街区は「元和の町割り」と呼ばれ碁盤の目のように整然と作られています、町の南北軸を東へ45度傾けての碁盤目状です。沢庵和尚の復興の考えは、あくまで南宗寺を創生期の姿に戻すことでした。

しかし、寺地を替えられ、町筋の方角を変えられ、どうして創生期そのままの南宗寺を復興出来ますでしょうか。そこで沢庵さんは「寺地を替えられたのはどうしようもない。だけどせめて寺の向きだけは室町時代のようにしよう。替えられた場所で室町時代を再現しよう」と考えました。これが現在の南宗寺です。(上の堺学第三集よりの境内図をご覧ください)



沢庵和尚



総門はじめ2,3の建造物は元和の町割りに沿いながら本堂、仏殿などは真南、真東に向いています。このように南宗寺は2重構造になっています。沢庵和尚は堺奉行に逆らったのです。文化財特別公開時の南宗寺は何事もなかったように秋の盛りです。堺の町中とは思えないほど静かで、秋を満喫できますが、その昔、『フォーラム堺学第三集』135頁より堺奉行と沢庵和尚のせめぎ合い、町衆の夏の陣以前の堺に戻したいその思いが残るのがこの南宗寺です。

参考文献：『フォーラム堺学第三集』

ガイドの豆知識2 「晶子桜」の誕生と「白桜忌」によせて

今年は桜に関して話題の多い年でした。1つ目は、ベルギーから譲りうけた桜と、日本に古くからある豆桜という桜をかけ合わせて誕生し、大仙公園で長年育てた桜が、新しい園芸品種として「日本花の会」に認められ「与謝野晶子」と命名されました。そして市長によりその桜の愛称を「晶子桜」としたこと。2つ目は、100年ぶりに新種の桜が発見され、「クマノザクラ」と命名されたこと。3つ目は、今年は例年になく満開になる時期が早かったことなどでしょうか。

ところで「歌人・与謝野晶子」は桜が好きであったとかで、これに関する話を晶子の長男光氏はその著書「晶子と寛の思い出」の中で次のように書いておられる。

「桜は母が非常に好きだったんですね。どんな桜でも好きでしたけれど」と言って、桜に関して晶子のエピソードをあげておられる。以下に列挙させていただきます。

- 1) 「細桜」のこと・・・与謝野家の表紋は「花菱」であるのに『うちの両親は裏紋である「細桜」を気に入って表紋として使っている』
- 2) 「酔楊貴妃」のこと・・・『うちの母が言うには、花びらが赤い桜で、桜の中では一番赤い桜ですって。母の説ですよ。ところがこの桜、どこを探してもないんです。方々の桜を見るうちにみつかったのです。神代寺植物公園に一本だけ』
- 3) 白桜院・・・『母が好きだったのは、(桜のうちでも)むしろ白い桜でしょう。自分で「白桜院」とつけたくらいですからね』

ところで晶子はあのような感性をどこで身につけたのでしょうか。

これについても光氏は言うておられる。「とにかく古典を勉強したっていうことが、非常な強みなんですよ」それと堺に「河井醉茗さんを中心に短歌や詩を作るグループがあった。晶子はそこで初めて歌を作ることを覚えた。だから河井醉茗さんが初めての師みたいなものであるわけです」それに「うちの母は、なんでもきれいなものが好きでしたからね。なるべくみんなが悪い面を忘れて、きれいな面を見るようにすれば、世の中が明るくなるっていうのが母の考えでしたね」

もう一つは「旅行をするというのは、見たこともない景色を見るんですから、そこで感情が湧いてくる」と言うので旅の歌が多いし、未発見の歌碑も多くなって来る、「歌碑が立つというのも、その土地、土地の風物をうたっているからだ」ひとつ、未発表の歌碑をご披露しますと

石狩の
定山溪の山荘は
夜半も朝も
川のみぞ鳴る 与謝野晶子



これは北海道札幌で見つけた歌碑に書かれた晶子の、おそらく未発表の歌及び歌碑です。このように、亡くなって何十年もたつのに、その歌は愛され、歌碑が作られ、桜にまでその名がつけられてゆくのは特筆すべきことではないでしょうか。

参考資料：「晶子と寛の思い出」与謝野 光

ガイドの豆知識3 「ものの始まりなんでもさかいがまた1つ」

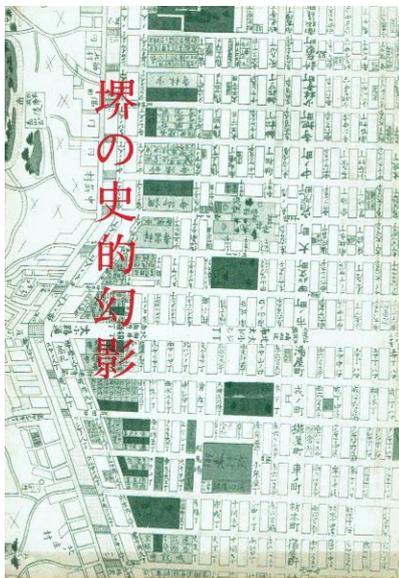
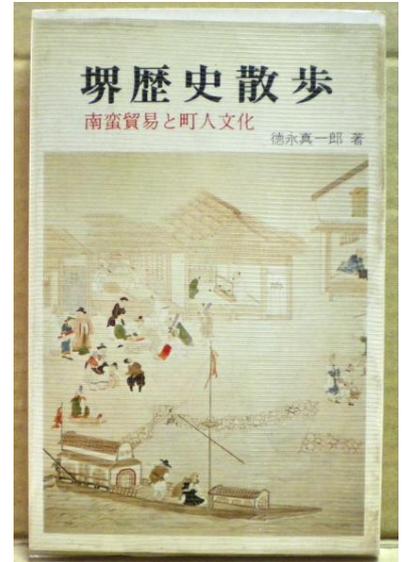
室町時代初期(1390年代)のものと思われる住吉大社の古文書に「9月の相撲会には、昔は堺浦において三韓の貢する珍財を以って交易市をなし、これを洛市と名づけた。これ本朝【市(いち)】の始めである」と書いてある。

これを知ったとき私は二つのことを思いついた。

まず一つ目は、自給自足の時代から物々交換の時代へ、自然発生的に人々と結びついて賑わいを生んできたのが「市(いち)」である。人が集まりやすく、当然ながら品物の運搬に便利な場所が堺浦であり、海際の神社の境内だったのである。

また「市」と言うものが“神の住む世界と俗世との架け橋”と言われていたものであるがゆえに、その神様の年一度のお祭りの日にお礼の意味で、冷蔵庫も氷もない時代に、新鮮なものを神前にお供えしよう、そして町の人も楽しもうと言う心で始まったのが、魚貝類を夜に販売しようと言う大魚夜市の謂れであるということだ。

二つ目は“縁は異なるもの山坂越えてワサビは刺身のつまとなる”の歌のごとく、最初は自分の持っている物と他人の持っている物との交換から始まり、海の物と山の物との交換売買に移り、当初不定期日開催であったものが特定日に開催されるようになった(三日市、四日市の町名の起り)。そうこうするうちに「市」が商売の原点であるということが認識されだしたため、戦国大名もその誘致や保護に乗り出し、織田信長にいたっては楽市楽座のように政策の大きな柱とした。



さて、堺はどうか。平安・鎌倉時代から堺浦は魚貝類が豊富で、これを近隣の諸国に売りさばく魚商が多く居た。その上に東大寺やその他の社寺の領地は中国・四国地方に多く存在し、そこからの物資は奈良と最短距離にある堺浦に陸揚げされていた。

ところが南北朝の動乱により堺を経由する物資は急激に増加し、思いがけない軍需景気のために、商人は大いに儲かり、浜辺には倉庫(納屋)が立ち並び、運輸業、倉庫業、金融業等々商業的な業者が増えてきた。

これを見れば堺は日本の商業の始まりの地ということが言えます。これも「ものの始まり何でも堺」の一つです。

参考文献：『堺の史的幻影』(田島清) 『堺歴史散歩』(徳永真一郎)

ガイドの豆知識4 南宗寺「千家一族の石塔」について

南宗寺に「千家一族の石塔」がありますが、これがどのようにして出来、どのような変遷をたどってきたか「全堺詳志」で見てください。

今、南宗寺山内に天慶院という寺があります。この寺は元・海眼庵(カゲソア)と言いました。そのころの話ではありますが「全堺詳志」を見ますと「海眼庵二千利休。同妻春栄。並ニ嫡子道安。其ノ外千氏一族ノ石塔アリ。ソノ所以ハ。利休堺住居ノ時。コノ庵ノ檀家也。因テソノ死後ニ。茶道ノ門弟。是ヲ立ル也。」とあります。利休はこの寺の檀家だったのですね。

これは大坂夏の陣以前の話で、それでは「元和の町割り」以後はどうなったか、もう少し「全堺詳志」にお付き合い願いますと「元和年中。沢庵今ノ南宗寺ヲ再興ス。海眼庵モ寺内ヘ引キ移サル。シカレドモ枝院ナレバ。境内窄(セ)メ、余地ナキニ依ッテ。千氏一族ノ塔悉(コトゴトク)ク方丈ノ墓地ヲ借テ。是ヲ移セリ。」「元禄年中。堺ノ住人高木重三郎ハ常叟宗室ノ門弟タルニヨッテ。叟ノ塔ハ勿論利休ノ塔ヲモ再興ス。」とありますから、この時に利休居士供養塔前の水盤が作られ、

【元禄13年庚辰 高木経幸喜捨 海眼庵】の文字が刻まれた時と一致します。

これ以後たくさんの方が再興にかかわり(例えば享保年中、「海部屋宗雪が原叟宗佐ノ塔ヲ……」と言うように)、また利休の子孫が増えるに従い、その供養塔地は大きくなりました。これで終われば話は簡単なのですが、そうも行かないのです。というのはこの時の供養塔の場所というのは今の場所ではないのです。太平洋戦争が終わって約10年、昭和31年だったと思いますが、堺市が復興事業の一環として南宗寺の横に道をつけるに際して、南宗寺の境内を少し削ったことがありました。

その時に利休一族の塔も、現在の天慶院の裏側少し北から現在地へ移されました。そして現在に至ると言うのが事実です。

動かないから不動産なのに、長い歴史のうちには面白い話があるのですね。なお、海眼庵を天慶院と改号するのは享保初年(1716)のことです。南宗寺には、徳川家康の話以外にも面白い話がまだまだありますよ。



南宗寺「千家一族の石塔」

ガイドの豆知識 5 「堺と高野山」

堺の町を東南に向かって貫く西高野街道は古くからひらけ、平安時代後期から鎌倉時代初期には高野参詣道として使用されていた。室町時代から江戸時代には、港町堺と高野山との物資輸送でにぎわった。元和の町割り以降の堺においては、大小路と接続している。高野山に登ると、金剛峯寺に御影堂という建造物を見る。現在ある建物は江戸時代、紀州侯の寄進造営したものであり、その前の御影堂がどんな姿をしていたかわからないのであるが、1388年に堺の商人の万代屋(もずや)が独力で修築したものであった(一説には奥の院の修造)。この建築、設計作業には人や物の経費だけでなく、堺から高野山までの間の複雑な南北朝の支配地を通り抜けるだけでも莫大な費用が掛かったはずである。



また戦国時代に堺を見たポルトガルの宣教師の報告によると、当時の堺は、「二つの門があって番人が居り、夜はこれを閉じるを例としていたばかりでなく、昼間でも紛擾(フジヨウ)があれば、すぐ閉じた。当時は戦国時代の事であったから、各地には常に戦争の絶え間がなかったが、堺はひとり中立独立の都市であって、壕の内は平和にみち、勝者敗者もここへ来れば、皆平和裡に安楽に生活し、敵味方といえども逢えば微笑をかわしながら、愛情と礼儀とをもって応対した。だが壕の外五歩を出ずると、たがいに果たし合いをした」とある。

この不思議な現象については、日本側の記録にも多少述べているものがある。たとえば『茶湯古事談』に「和泉、河内の間には、戦争の絶え間がなかったけれども、『堺は弘法大師高野の門前』だと言われて、ここばかりは敵も味方も入り交じり、銭湯などで一時込み合い、へし合っても喧嘩をしなかった」と言っている。

いわゆる『弘法大師高野の門前』とは何を意味するか。大師の深き慈愛に恵まれて、死後は敵も味方もなければ、また宗旨の異同もなく、大師の手で皆救われるとの信仰から、堺が中立地帯、無風地帯であった事を意味するのである。これは、もとより事実としては多少の割引を要するとはいえ、戦雲が全国を覆っていた当時であっては、一大奇蹟といわなければなるまい。これほどまでに堺の人々は意識の有る無しにかかわらず高野山を頭においていたのである。とは言え「元禄2年堺大絵図」で見ても、寺院225ヶ寺、これには種々の宗派を含んでいる。此処に私は「弘法大師門前の町」と言うと同時に堺は「商売の町」であり、「和を乱すものを嫌う町」、それ故に連歌師牡丹花肖柏の狂歌にもあり、山上宗二記にも記されているごとく「我が仏隣りの宝婿舅(ムコシュウ)・・・」を話題にすることは「商売の障りにこそなれ、得にはならない」と言う事が徹底していたのではないかと思う。

ガイドの豆知識6 「堺へ来て大きく花開き、堺の文化に貢献した人達」

武野紹鷗や千利休が活躍していた時代は、日本は戦国時代と言われていて、全国各地で戦いの絶え間がなかった。そんな時代の“堺”は濠にかこまれ、中立、自由自治都市であることは知られているとおりである。三浦周行氏はその著「大阪と堺」の中で「砂漠のオアシス目がけて、求めて得難き無上の楽土と、貴賤僧俗、老若男女の、我も我もここに殺到するものの年ごとに増して繁栄をきわめたのは当然の成行きであった」と書いておられます。

それでは具体的にどのような人達がこの“堺”を目指してきたのであろうか、三浦氏は続ける。「京都の公家も下向すれば、学者も歌人も入り込み、武士も僧侶も、商人も芸人も、あらゆる分野の人々がいる。例えば、京都を追われた寺院、キリスト教徒とあり、その中には、出家では一休、蓮如、沢庵、武家では長慶、医師では曲直瀬(まなせ)道三、文人では肖伯、(父の代ではあるが)紹鷗等、いずれも皆この楽天地“堺”へ来て“堺”に育まれて大をなした人たちである」

下記についても、お馴染みの人達と思いますが、この人達の足跡を訪ねて回るのもガイドとして面白いと思います。

- | | |
|------------------------|---|
| 一休宗純(1394~1481) | 後小松天皇の皇子堺・住吉にしばしば来遊、堺の尾和宗臨が帰依、大徳寺方丈、真珠菴他を建立。 |
| 蓮如兼寿(1415~1499) | 文明年間堺に来て檜木屋道頭の帰依を受け信証院(西本願寺堺別院)を建立。 |
| 沢庵宗彭(1573~1646) | 大徳寺・南宗寺の住持、大阪夏の陣後、南宗寺を現寺域に再建。 |
| 三好長慶(1522~1564) | 管領細川晴元の代官として堺を支配、のち晴元を退けて畿内を平定。南宗寺を創建。連歌をよくするなど、教養があった。 |
| 曲直瀬道三(1507~1594) | 織豊期の医者、京都の人、正親町天皇、将軍足利義輝、織田信長、豊臣秀吉等から重用された。近代医学の祖といわれる。 |
| 牡丹花肖柏(1443~1527) | 連歌師、古今集の伝授を受けた。豪商紅屋の援助を受け堺に住み、多くの門人が居た。 |
| フランシスコ・ザビエル(1506~1552) | 日本におけるキリスト教の開山、日本での2年4ヶ月の間にキリスト教の礎石を据えた。 |
| 武野紹鷗(1502~1555) | 村田珠光、鳥居引拙につぐ茶の湯の名人といわれている。堺流茶道の開祖とも見なされ、利休の先生。 |

以上のような人達に刺激を受け、堺の町人達は文化的事業を展開することが出来たのかも知れません(例えば千利休、津田宗及)。

さらに武家の育ちでもないのに大名になった小西行長等、生粋の堺人の活躍について、思いを馳せていきたいと考えています。

参考文献：『大阪と堺』 三浦周行

ガイドの豆知識7 堺の文化 商人たちの活躍

「堺鑑」(カイクガミ)の土産の項に「一休和尚烏繪扇子」(イクキウオウシヨウ カラスエオキ)と言うのがある。これは京都から堺へ来ていた一休禅師が堺の扇子屋のために繪を描いたというのであるが、一休さんだけではない、多くの人達が流れの低きにつくがごとく平和な“堺”へ“堺”へと流れてきて色々な足跡を残してくれた。

往時の“堺”の人々はこれらの人々に刺激を受けて、また直接刺激を受けなくとも「市民自身が手を下して各種の文化的事業に寄与した誇りを持っていた、それも商人が多い。

例えば仏書では『五燈会元』の刊行があり、正平版の『論語』は堺の市民道祐居士(ドウウコジ)の出資、天文版『論語』は堺の阿佐井野氏が清原家の本を出版したものであり『三体詩』は明応3年の版木を阿佐井野宗禎が買って出版したものである。その他、『千字文』は石部了冊、阿佐井宗瑞は『医書大全』、三宅亡洋の『徒然草』など、時代は下るが堺案内のものとしては衣笠一閑の『堺鏡』高志芝巖の『全堺詳志』等があり、かくも盛んな出版は堺の商人の手によってなされた。勿論これら以外にも現在残っていない沢山の出版物もあるだろう。

その他、歌謡は12世紀末の今様歌謡が、時代が下って変形・変質するがそれを最も小歌的な小歌にまで洗練したのは、16世紀末ごろの顕本寺の高三隆達(タカガ リウツツ)です。

連歌は、晩年を堺で過ごした牡丹花肖柏の弟子の宗椿の紅屋をはじめとして商人衆が多くいる。茶の湯では紹鷗始め、宗及、宗久、利休等、皆商人である。

このうち利休は天正13年(居士号を勅許)と14年(黄金の茶室)の2回の禁中茶会で、天下人秀吉の天皇・朝廷対策を援けている(何となれば、御所において茶会を開くことができるのは、本来御所の主人である天皇だけのはずであるが、それを関白秀吉が開くことによって、実質的な権威者が自分であることを公家達に示したわけである)。このように堺の商人たちは深く天下人にまで食い込んでいたのである。

そのほかにも商人たちの中から身を起こして、例えば薬種商から大名になった小西行長、僧侶では江月、玉仲、翠巖等多くいるが皆堺商人の子弟から出ている。ここで特筆すべきはこれらの僧侶の宗旨が色々であるということである。これらの事からこの狭い“堺”に多くの寺院が軒を連ねる一つの原因があるのではないのでしょうか(泉南仏国といわれ、1689年に作られた堺大絵図でみても社寺が225ヶ寺あり)。このように堺の商人が文化に大きく貢献してきたことについて述べてきたので、現在の日本文化に多大の影響を与え、堺市が条例まで作って一目置いている茶道、即ち千利休につき述べてみたい。次回をお楽しみに。

で今回は終わろうとしましたところ、東京の友人から突然メールが入りました。かいつまんで書きますと、「ところで『千利休』という小惑星があるのをご存知でしょうか。先週、友人たちと花見に行きましたが、その時堺から買って帰った堺の地酒『千利休』を持参しました。これを飲んだA君がこの小惑星の話をしてくれました。

彼が勤めていた会社は滋賀工場内に天文台を持っており、観測活動で発見した小惑星に、ゆかりの深い地名、人名を名付けて登録しています。『千利休』と命名したのは、天文台を造ったB氏が裏千家の汎叟宗室氏(現・千玄室氏)と昵懇(ジツコン)の間柄だったからだろうと思います。この話は堺市でもあまり知られていないのではないのでしょうか。」

(小惑星「千利休」は「(5330)Senrikyu」として、IAU(国際天文学連合)に登録されています。英文字でSenrikyuです)利晶の杜、利休屋敷跡のガイドでお使いください。

参考文献 『別冊太陽 千利休』、山本兼一『利休にたずねよ』小西甚一『日本文学史』
中井正弘『堺都市史探訪』三浦周行『大阪と堺』

ガイドの豆知識8 「一期一会 (いちごいちい)」は「おもてなし」の心

「徳川時代の国持ち大々名の中の三人の大茶人」として「初期の細川三斎、中期の松平不味、末期の井伊宗観」を挙げた人がいる。「井伊宗観」この人こそ幕末の大老「井伊直弼」である。そしてこの人が、茶人の常に心得ておかなければならない理念を【一期一会 (いちごいちい)】という四字熟語で表した。彦根藩 35 万石の大名でありながら、なぜそれ程までに「茶の湯」の勉強をしたのだろうか。

この人は 17 歳から 15 年もの間、部屋住み（隠居生活）をしており、あとつぎの長兄の死去により藩主を相続したので、その部屋住みの間に諸芸を修練したのであるが、とりわけ茶道を好み、力を入れて勉強していたのである。その結果「茶の湯一会集」(チャノイチイシュウ)を残しており、その中に【一期一会】の有名な言葉がある。しかし、彼の造語ではあるが彼が言い始めた理念ではない。それではこの人をこれほどまでに魅了した茶道の理念は“誰が言い始めた”のか、また“どういう意味があるのか”それを探ってみよう。

「茶の湯一会集」が書き表された時を起点として 270 年程さかのぼる。豊臣秀吉の時代、千利休の一番弟子ともいわれる山上宗二が著した「山上宗二記」を見てみよう。その中に「路地へはいるから立つまで【一期に一度の参会】(いちごいちいどノカンカイ)のように」とある。

ではこの【一期に一度の参会】とは何なのか、これこそ客として茶席に招かれた時の心構えを言っているのであって、この茶席で一緒になった客同士、使われた道具、出された料理、茶等々を、最初から最後までしっかりと見て、一生に一度のこととして気を引き締めてかかれ、余計なこと、たとえば「我が仏、隣の宝、聳舅 (ムコシュウ)、天下の軍 (イクサ)、人の善悪 (ヨシアシ)」(夢庵狂歌)など茶に関係のないことは話題にするな」と念を入れて言っている。此处で見過ごせないのは、以上のことは“千利休”の言葉として、山上宗二が聞いたと書いていることです。利休も宗二も堺の人です。よって「一期一会」の言葉もその真髄は堺でうまれた、というわけです。(ここに“物の始まりなんでも堺”がまた一つ)

それで、一方の亭主の方の心構えはどうあるべきか、同じく「山上宗二記」から見てみよう。「茶の立つ前は無言、心中に客人を敬うこと。貴人や茶の湯上手にたいしては勿論、平常参会する人に対しても、心の底ではこれを名人と思って敬うこと。そういう心構えで客人を招くことが大切である」と言っている。これを裏千家の前家元の千玄室氏



は現在にあてはめ、「人間は増長する。おごる気持ちがあるからいさかきがおきる」「茶室では立場や身分の違いも利害もない。(茶を) いただく前に『お先に』と声をかけ、互いに気持ちを融和させる」「学ぶべきは謙虚な心。訴え続けるべきは人と共に生き、人のために手を差し伸べること」と毎日新聞の「憂楽帳」で述べておられる。これこそが“おもてなしのこころ”ではないでしょうか。

こんなに大事なことは千利休が遺したのから採るべきだろう、と思われるのは当然ですが、残念なことに利休は手紙は多く書いているが、“いわゆる茶道論”と言われるものは書いていない。ゆえに一番弟子が利休から聞いたことを利休の説として取らざるを得ない。

それでは次回は、利休から聞いた“利休の茶の湯”に関する本で「堺で生まれた」と言われる物があるので、それについて述べてみよう。お楽しみに。

参考文献 井伊直弼「茶湯一会集・閑夜茶話」岩波文庫、唐木順三「千利休」筑摩書房
桑田忠親「山上宗二記の研究」河原書店、熊倉功夫校注「山上宗二記」岩波文庫

ガイドの豆知識9 二つの茶書

堺には2つの茶書「南方録」と「山上宗二記」に関する場所がある。

まず、「南方録」(現代ではナンポウクと読むのが一般的)です。「南方録」は、ずうっと“実在”していなかったかのように、読んだとか見たとかいう記録がないまま、立花実山(九州福岡黒田藩重臣)によって書写され、利休が亡くなって100年(100回忌)のある日、「これが利休のおめがねにかなった本である」として突然に出現した。

著者とされている南坊宗啓(ナンポウウケイ)は、堺の南宗寺集雲庵の僧侶であり、利休の弟子の一人とされているが、他の史料には一切登場しないことから、架空の人物であるとされている。南宗寺の駐車場の北、大きな行事のある時などは第2駐車場となるところに、今は廃寺になった『集雲庵』(シュウウン)という寺が明治の初めまであった。

現在流布している「南方録」諸本の原本である立花家本を筆写したのは立花実山(タハナヅツザン)であるが、現在の研究では『南方録』は実山が博多や堺で収集した資料を編纂して創作されたものであると考えられている。実山たちが千家流の茶を元に、一流を立てるために作った理論書にちがいない。例え偽書であったとしても、そこに盛られている内容がすべて虚偽というわけではない。作るにあたり先行の記録を種々参考しているわけで、その点を考慮すれば「南方録」は珠玉の資料ともなりうるだろう。私は、「茶道の聖典」とも称せられる【「南方録」が堺で作られた】ということにして世に出ている事実を指摘したい。

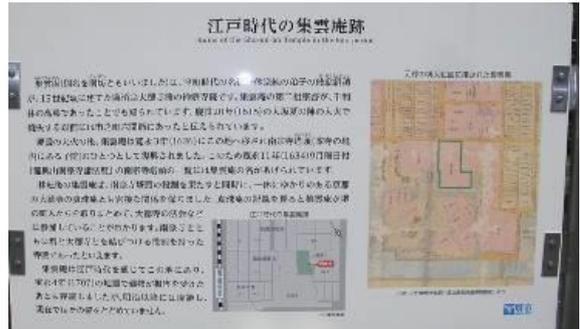
次に、同じく南宗寺の『天慶院』に「山上宗二」の供養塔(現在非公開)というのがある。これは罪人として死んだがゆえに、生まれ故郷の堺に墓も供養塔もないのは可哀そうだということで、近年「つば市」の故・谷本会長が建てたものだ。

「山上宗二記」であるが、これは本物である。「山上宗二」(ヤマノウエウジ)は堺の人であり、利休の弟子であり、ともに秀吉の茶頭を務めた人である。最後は秀吉によって殺されるのであるが。「山上宗二記」は、わが国の茶の湯開山といわれた「珠光」伝来の茶の道の正統を伝えた秘伝書として、最も代表的なものである。茶の湯が形成されるには長い年月がかかった。

『わび茶の祖とされる村田珠光(ムラタジユカ)が登場するのが十五世紀中期、それから数えても「宗二記」の誕生まで、約140年の歳月を経ている。が、しかし天正10年(1582年)に急激な展開が始まった。本能寺の変の後、豊臣秀吉と千利休という二人の出会いは茶の湯の革新を引き起こした。その革新も、天正19年利休の切腹によって終わったわずか9年であるが、その前半を利休と共に歩んだのが「山上宗二」である。名人利休の茶の湯を「山を谷、西を東と茶の湯の法度を破る」と表現して、必死に追跡しながら書き留めたのが「山上宗二記」である』(熊倉功夫山上宗二記)

以上2冊の茶書は、「南方録」は堺の人が書いたと主張し、「山上宗二記」は事実堺の人が書いている。そしてどちらの本も茶道には欠かせない本である。よって、堺は茶道において一目おかれても然るべきだと思います。

堺は世界遺産のある町として更に多くの人を訪れるものと思われれます。よって南宗寺についても本坊以外のこんな話を紹介してはいかがでしょうか。



参考図書・西山松之助校注『南方録』 岩波文庫・熊倉功夫校注『山上宗二記』 岩波文庫・桑田忠親著『山上宗二の研究』 河原書店・唐木順三著『千利休』 筑摩書房・村井康彦著『千利休』 日本放

ガイドの豆知識10 妙國寺に医学校と女学校があった

【野澤昭一】

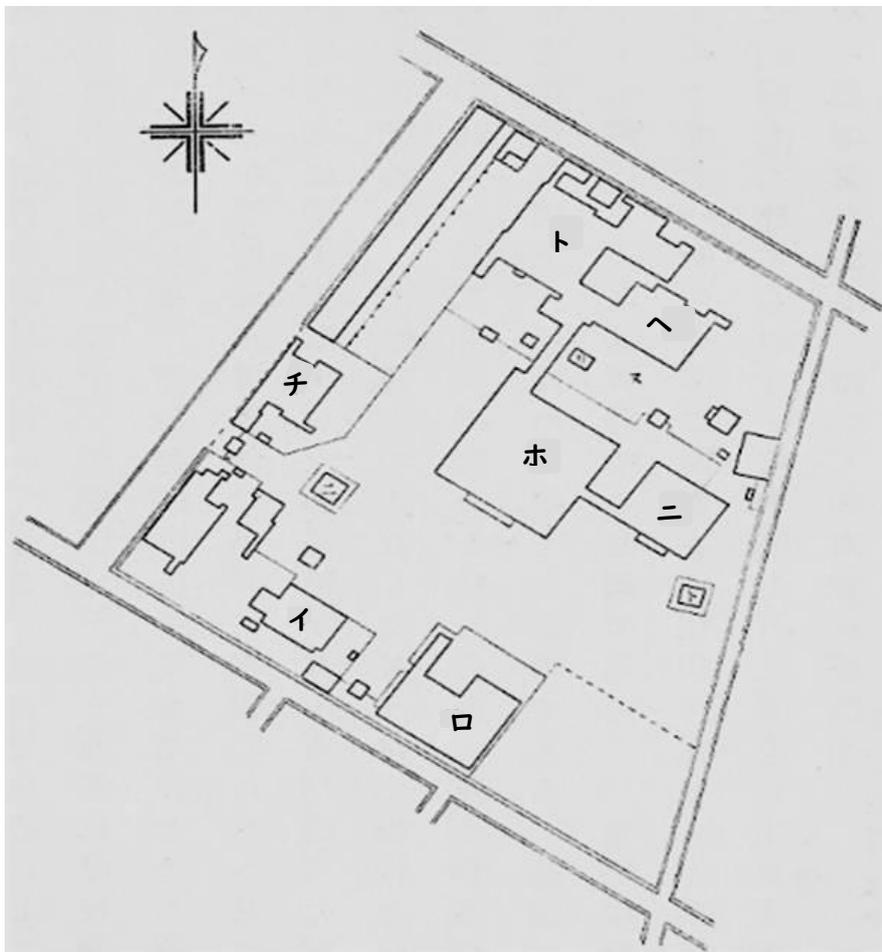
堺事件の記憶がまだ冷めやらぬ明治7年(1874)5月のこと、妙國寺境内に堺縣醫学校が新設された。(堺市史第3巻より)

堺縣令税所篤が、堺縣に高等専門教育学校を新設する事業の一環としてであった。当時、堺縣假醫学校と称した。同年6月醫学校診察所規則を設け、校内に診察所を置いた。

- ・同8年2月に文部省の許可を得て醫学校兼病院としたが、暫くして新しい場所に移った。
- ・同9年9月に従来のを廃して、公立堺縣病院となし院中に醫學教授局を置いた。
- ・同10年政情不安定や財政不足等が原因で、惜しくも廃校になった。(堺市史第3巻より)

その後、堺市史第7巻によると、妙國寺境内図に舊愛泉女学校校舎が記載されている。現在の香ヶ丘リベルテ高等学校(浅香山)の前身であり、同校の沿革履歴に創立大正11年(1922)が記載されています。妙國寺には、信長の蘇鉄伝説・家康の本能寺の変・堺事件等の、事件がらみの逸話話題が豊富だが、近代教育文化発展の場所としての価値を見直しても良いのではないだろうかと思えます。ガイド時に、妙國寺近代歴史の一環としてひと言加えれば、なお一層の深み・重みがでてきそうな気がします。ちなみに現堺市立総合医療センターは、大正12年(1923)創建の堺市立公民病院が前身であり、明治7年の堺縣病院との直接の関係はみられない。税所篤は、師範学校・医学校等教育関係・大浜旧堺燈台・奈良公園の建設等の優れた業績を今に残している。

大正11年妙國寺境内図(堺市史第7巻より)



- イ 梅明院(センミョウイン)
- ロ 舊堺愛泉女学校(キュウサカイ アイセンジョガッコウ)
- ハ 土佐十一士割腹址
(トサジュウイチシカップクアト)
- *ハ=図中には確認できない
- ニ 三重塔(サンジュウトウ)
- ホ 本堂(ホンドウ)
- ヘ 祖師堂(ソシドウ)
- ト 鐘楼(ショウロウ)
- チ 惠照院(ケイショウイン)
- リ 徳正殿(トクショウデン)
- ヌ 蘇鉄庭園(ソテツテイエン)
- ル 客殿(キヤクデン)
- ヲ 庫裏(クリ)

ガイドの豆知識 II 「文」は「武」に勝る

南宗寺に「牡丹花肖柏の墓」(ボタンカショウハク 1443~1527、夢庵と号す)というのがある。このひとは堺の人達に文化の面で非常に影響を与えた人で、死後約50年の後に山上宗二(1544~1590)の書いた著書の中に「夢庵狂歌にいう」として取り上げられている。「牡丹花肖柏」は何が偉いかと言いますと「古今伝授」(コキンデンジュ)を受けていることです。古今伝授とはなにか、簡単にいいますと『古今和歌集』(905年に成立)という「日本で初めての勅撰和歌集」に関して、500年もたちますと一部の解釈が出来ないという問題が起こってきた。そこで1首の中のある言葉がわからないという語釈からはじまり、さらにこの歌がわからないという1首全体の注釈へと移り、やがて『古今集』全体をどのように考えるかという読みに入っていきます。その中で特に「古今集」の秘密を伝えること、そして、それが様々な権威と結び付いて「古今伝授」と呼ばれるようになりました。

通常、「古今伝授」は3つの流れに分かれます。つまり東常縁(トウノツネリ 1401~1484?)という武将が作り、のちにそれを連歌宗祇へ。宗祇から三条西実隆(サンジョウニシサネタカ 1455~1537 武野紹鷗の和歌の師)に伝授されたのを、細川幽斎(ホソカワユウサイ 1534~1610)をへて天皇家に入ったのを「御所伝授」、堺の牡丹花肖柏にもう1人の人を経て伝授されたのを「堺伝授」、奈良の饅頭屋宗二(マンジュヤソウジ 1498~1581)に伝授されたのを「奈良伝授」と言います。細川幽斎を経て天皇家に入る前に、大変なことが起こります。

天下分け目の関ヶ原です。慶長5年(1600年)9月15日、東軍約9万、西軍約8万の軍勢が激突し(午前7時頃~午後2時頃)、東軍勝利で終わったのですが、古今伝授はどうなったかと言いますと、9月15日以前に西軍は東軍に味方する畿内の大名を攻め



ます。細川幽斎は丹後田辺城に居り、息子及び丹後の精鋭部隊は皆、徳川家康の方に味方するべく出て行って、城を守っているのはたった500人、田辺城で籠城するも落城覚悟です。細川幽斎と言え、文化の伝統を担う当代一の文化人です。当時唯一の伝授資格の保持者で、田辺城落城と共に死去すれば王朝文化の伝統維持にとって大いなる損失となります。そこで後陽成天皇(ゴヨウゼイテンノウ)は2度の使いを出し開城を説得するのです。そこでしぶしぶOKしました。その日が9月13日、関ヶ原合戦の2日前で、その後、幽斎の命がけの戦略で丹波と但馬の西軍軍勢1万5千人は関ヶ原合戦に参戦出来ませんでした。即ち文化の力は武力に勝ったのです。

話は変わりますが、堺の人は牡丹花肖柏を受け入れると同時にその教えを取り入れ、自分のものにしていきました。武野紹鷗しかり山上宗二しかり、だから茶道には和歌の影響が色濃く入り込んでいます。関ヶ原合戦にはもう1つ面白い話がありますがそれは次回に。

参考文献 茶道雑誌 平成30年4月号 生形貴重
山之上宗次 『熊倉功夫』

フォーラム堺学 第15集 西田正宏

ガイドの豆知識12 関ヶ原の戦いとリーフデ号

「利島の杜」の総合受付を通過して「千利休茶の湯館」に入りますと、先ず目にするのがオランダ船リーフデ号です。よく観察してください、商船には不必要な大砲が見えますね。なにかしら場違いな船が置いてあるように見えますが、それが場違いではないのです。

それもそのはず、この船の活躍していた時代は「大航海時代」と言って、15世紀におけるポルトガルとスペインの海外進出を先鞭とし、16世紀後半には、両国に加えてイギリス・オランダ・フランスなどが、非ヨーロッパ世界における領土獲得と、植民地交易をめぐる覇権を争っていた時代なのです。時代は少し後になるが、1620年にオランダとイギリスは平戸で両国の防護同盟を締結したり、言わばアジアの海は海賊の跋扈（ばっこ）する世界だったのです。それはさておき、リーフデ号はオランダから日本にやってきた最初の船なのです。しかもマゼラン海峡を越えて太平洋に抜けて、豊後の国にヨレヨレで漂着したのですが、その報告を受けた徳川家康は、この船をいち早く堺の港に回航させ積荷を調べると、(一説には)鉄砲500挺、銃弾5千発、火薬2270キロ、その他多くの武器があったといわれています。これが西暦1600年の春頃の話、この年の秋には「関ヶ原の戦い」です。

誰が考えても「関ヶ原の戦い」では、これらの武器が使われたものと思いますよね。ところが今まで詳細は明らかになっていないのです。「歴史家・平川新」の説であるが「この大量の武器と弾薬を確保したことで、家康は関ヶ原の戦いに勝つことができたのである」とまで言わしめているのに、ですよ。これを機に日本はオランダとの貿易関係を強めていくのであるが、そのことも言わない。また、このオランダ船リーフデ号に乗っていたイギリス人航海士ウィリアム・アダムス(日本名:三浦按針—みうらあんじん)やオランダ人のヤン・ヨーステンを貿易や外交のアドバイザーとして召し抱えたのです。



これらのことは、今の私たちが【江戸時代の歴史観】に大きく影響されているように思います。江戸時代の歴史観における最大の問題は【戦国時代史から外国とのつながりを取り除いたこと】です。江戸時代は鎖国中なので昔から外国との関係はなかったことにして、すべて国内の問題として扱おうとするのです。言い換えるなら、すべての為政者の事績を、国内の農業型の為政者を語るような話にしてしまうのです。極論からすれば「この世界に日本以外に国というものがない」という風に教育されていたからです。ですから、【大航海時代】を語らずに、この時代を語る場所に無理が生じます。次回は「大航海時代」のことをもう少し詳しく述べることにしましょう、お楽しみに。

参考文献

『戦国日本と大航海時代』 平川新 中央公論新社

『白熱の信長対談 小泉純一郎×安部龍太郎』 文春 2018年12月号

『作られた史観』 第43号 安部龍太郎